

# 報告／3・11と文学

## East Japan Great Earthquake Disaster and Japanese Literature as a Report

千葉正昭

Masaaki Chiba

**梗概** 東日本大震災から5年数か月が経過し状況を勘案した上で、文学と震災というテーマで3点ほどの問題を考えてみた。体験を踏まえたものであるため標題に「報告」という文字を入れた。この間優れた文学作品や研究書も排出された。状況を相対化した上で、これからもより優れた観点にたった書物が刊行されることを期待している。

### 1、個人的な体験

平成23年3月11日午後、5階建てのビルが激しく揺れた。筆者は、そのとき仙台南隣りの名取市にある仙台高等専門学校で、同僚と話をしていた最中であった。が揺れはそれまで体験したことのないもので、正直心が動転した。余りにひどい揺れで部屋の外に出ることをためらい、机の下に身を隠した。本棚の本が飛び交った。とにかくどんどん揺れてなかなか収まらない。不安になり、このまま床が抜け落ちビルが崩壊するのではないかと危惧した。揺れがしばらく続いたあと、ようやく収まった。体を恐る恐る動かして机の下から顔を出すと、棚からほとんどの本が床に重なるように散らばっている。9段組みの造り付け12箱以上の本棚からほとんど全部と言ってもいいほど本が床に落ち、それらが折り重なった状態になった。これは元に戻すにはかなり厄介だなと思った。

廊下に出てみた。同じ階で開かなくなったドアのガラスが破られている同僚の部屋。もう一人の同僚は、机の上に置いておいた車の鍵が、どこに行ってしまったかわからなくなり、帰宅できないと嘆いている。

そして建物の外に出た。学生や教職員、あるいは隣接する看護学校の学生、近所の方々と、人々が続々と集まってくる。そういえば仙台高等専門学校は、この地区の避難場所でもあったのだ。その後高専の教務主事が、JRが不通になった故、教職員で帰宅できる人はなるべくその地区の学生たちを同乗させて下さい、加えて宿泊が可能な教員はなるべく泊まって欲しいと語った。

その間ラジオで、女川が壊滅的打撃を受けた、しかし女川原発は自動的に停止したとのニュースをも耳にした。一方でこの高専の高台から見える港町閑上（ゆりあげ）地区に、火の手が上がった。17時前だったが赤々と油や家屋が燃え出すのが見えた。残念だが、車を走らせるわけにもいかず、ただ茫然と見るだけだった。消防車が近寄るだけで、一般車両は規制されたいらしい。

翌日事務職員の方々が、必死で全学生の家宛に安否の問い合わせをした。地震の日自宅学習の日になっていたので、在宅の学生と高専で実験をしていた高学年学生とそれぞれが違っていたのである。のち悔やまれることに福島県浜通りで津波にのまれた学生が1名いた

ことが判明、皆首をうなだれた。その4日後、高専の敷地内で室蘭工業大学へ編入学が決まっていた学生と出くわした。彼の家は前述した閑上であった。おそろおそろご家族のことをうかがった。何と母上が犠牲になったとのこと。筆者は、「あなたが編入先の大学で一生懸命勉強すればお母様も喜んでくれると思う」というのが精いっぱいだった。その学生は、にっこり笑顔で頷いてくれた。この反応が、印象的な出来事として5年半以上たった今でも脳裏に焼き付いている。

さらに福島第一原発の水素爆発が起こる。放射能が雨や風によってどこまで飛んでくるのか。心配は、連日テレビのニュースとして報道された。福島県浜通りと宮城県南部地区は、すぐ隣りという関係だ。東南アジアからの留学生に伝えねばという思いは強く、敷地内で出会った学生に事態を伝えた。留学生も事情は分かっていたのだろう。眉をひそめた。ここ数日間の内に雨が降ったら、とにかく帽子を被ってくれと素人ながらの弁であった。

その後の混乱は、ここでは勘弁して頂く。

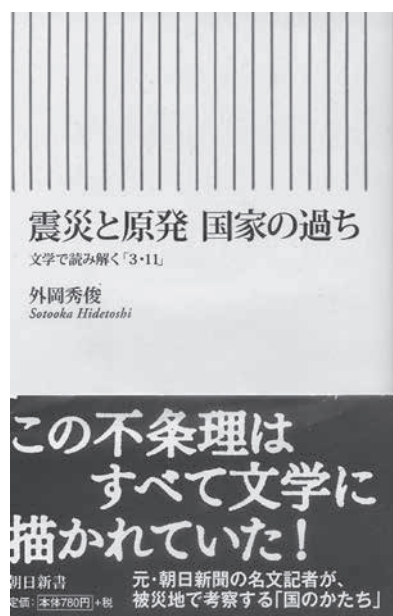
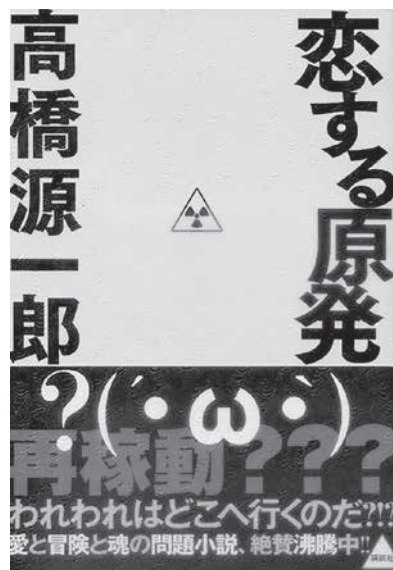
## 2、原発を巡っての文学

福島第一原発の対応を巡って、大変な事態になったことは言うまでもない。

こと文学の世界ではどうであったであろうか。8か月後に高橋源一郎が『恋する原発』（平成23年11月、講談社）を刊行した。これは東日本大震災の被災者を救おうという意図のもと、アダルトビデオ会社がビデオに登場する人物のうめきをちりばめながら、全く無能で「素晴らしい世界」を「ゲンパツ」政策に重ねた、政治嘲弄の物語である。相当な政治的戯画化である。チャリティアダルトビデオという過激な表現の中に優しい詩情が入り混じるストーリーと、放射能に汚染された時代に表現の自由をかけてセックスと政治を弄んだ風刺と玩弄の物語である。

いま活躍中の優れた論客木村朗子は、「セリフと歌謡曲のあいまに登場人物たちの会話が連なり、固有名詞が多用されるお馴染みの軽薄体で構成され」「不謹慎」ではないかと思わず読者が自己反省をしてしまうような巧妙な装置で、「きわどい政治問題が次々にくりだされる」(『震災後文学論』平成25年11月、青土社)と評価した。この彼方に高橋源一郎は、いまこそ行動すべきだと主張しているとどとの解釈をもほどこしたのである。見事な解釈だったと判断する。

高橋の造形ワールドは、それまで隠れていた



問題やタブー視されてきた日本の慣習的価値観へも、切り込んでいく意図はうかがえ、確かに新しい文学様式の誕生といえる側面も抱えていたといえるかもしれない。

ジャーナリスト外岡秀俊は、『震災と原発 国家の過ち』（平成24年2月、朝日新聞社）で困難な状況への解決策へのヒントが、実は過去の文学の世界にあると主張した。多少年配の方であれば、外岡がかつて『北帰行』（昭和51年12月、河出書房新社）で文芸賞をとった作家であることはお分かりであろう。

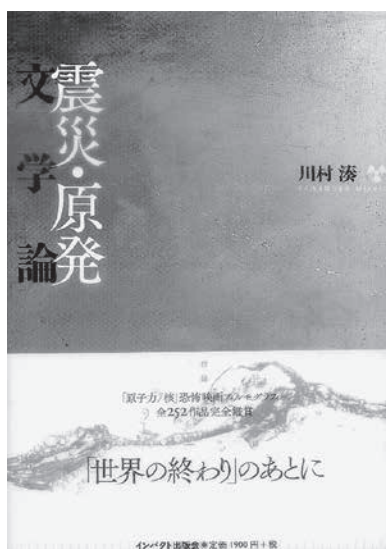
外岡は、フランツ・カフカ『城』は、あるときにはユダヤの律法、あるときには官僚機構、別の時には全体主義の象徴であると、様々に解釈されてきたという。〈城〉は、どのような象徴にも置き換え可能なものとしてあると。「寓話」としての構造を、カフカは物語に与えたのだと説明する。被災地での物語として読めば、〈城〉を第一原発、目に見えない〈掟〉を〈安全神話〉と、読み替えてもほとんど違和感はないという。

実は筆者は、平成27年7月17日18時から東北学院大学での〈震災と文学〉というテーマの外岡秀俊の講演を聴きに出掛けた。講演のあと聴衆との意見交換の時間帯があったので、筆者はうかがった。「『震災と原発国家の過ち』は、優れた作品だと思うしすごい着眼点だと感じると。その上でのお訊ねだが他の作家の震災に関する著作を系譜的になぞったり、それぞれの作家が如何様に状況を相対化させているかを多少お話しして頂けないか」と。外岡は、「今の段階ではそこまでは手が届かない」ことの旨を言った。しかしこちらの不明もあった。前述した木村朗子の著作が、刊行されていたのであった。のち小山鉄郎著『大変を生きる』（平成27年11月、作品社）、鈴木斌著『文学に描かれた大震災』（平成28年4月、葺柿堂）等も出版される。

時が前後する。平成26年11月8日、福島大学で日本社会文学会が行われた。3・11と原発問題が取り上げられた。地方にも関わらず聴衆は、100人を超えた。法政大学教授で文芸評論家の川村湊も、講演をした。更に元福島大学教授の澤正宏が福島市周辺や浜通りの放射線量について講演をした。彼は、非公式だが只今の段階で小学生ならびにそれ以下の子供で甲状腺がんが5人ほどいるとの報告であった。正直これは驚きを禁じ得ない数字で、じわりと何かを蝕もうとしているものの恐怖を伝えるものであった。この子供さんやご家族の心痛を思う時、いかばかりかといういたたまれない思いになった。のち筆者は、新幹線のなかでの字幕ニュースでこの数字以上のものを知ることになるのだが、平成26年11月段階の知識としては衝撃のものであり他の知人に伝えなければという思いを強く抱いた。

時が遡るが平成23年12月17日（土）福島市辰巳屋ホテルで、新エネルギーに関する講演会が開かれた。政治的集会であったためかホテルには200人以上が集まった。その中で福島郊外の温泉地での地熱発電が紹介された。民主党政権下での催し物で、原発に代わる形態としての地熱発電が大きく取り上げられた。

福島原発が爆発を起こして以来の政治的集会でもあったためマスコミ取材も多く、会場は



熱気に包まれた。シンポジウムの討論のあと講演のトリは真山仁であった。彼は『ハゲタカ』などの小説で経済小説家として名を成しているが、『マグマ』（平成18年2月、講談社）で地熱発電問題をテーマにして発電形態と送電の許認可問題で評判を呼んだ作家でもある。

ここで筆者の注釈を加えさせていただく。この小説は、物語の舞台／地熱発電採掘地が九州の大分県になっているが、取材は岩手県のある地熱発電会社である。実際取材を受けたその会社の元部長が筆者に語ってくれた。現在その会社の名称は、当時と変っている。次いでこの元部長は文学を愛好する方で、井上ひさしの『吉里吉里人』（昭和56年8月、新潮社）にも地熱発電が登場すると語ってくれた。漫然とこの小説を読んでいた筆者としては反省を強いられ、改めて井上ひさしの先見性に、脱帽した次第でもあった。

とまれこの平成23年12月に行われた真山仁の講演は、次世代エネルギー発電として地熱発電が自然再生エネルギーの切り札としてふさわしいものだという内容だったと振り返る。

最後に電力会社の役員の方が、挨拶をした。しかし、会場から原発で避難を余儀なくされた方から強烈な批判の声が上がった。「原発が止まった現在でも日本は電気の供給をなんとかやっているのではないか。原発は無くてもいいのではないか。避難者のことをどう考えているのか」、という強いメッセージで会場は一瞬静まり返り空気が凍りつくような雰囲気になった。その時原発のため非難したという言葉が、胸に突き刺さったのは筆者一人ではなかったろう。この発言に対するコメントを発する人は無かった。それ故会場は一段と暗い雰囲気が漂った。

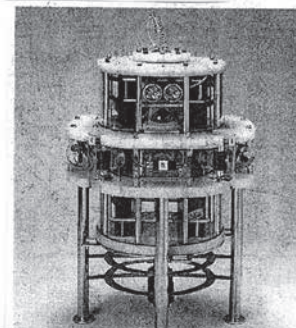
### 3、危険物処理に向けて

福島第一原発の爆発は、セシウムその他の放射性物質の放出という大変な問題を引き起こしたが、その後の事故処理では改めて日本の技術力の粋を集めてみせた現象を呈したことも銘記しなければならない。

「朝日新聞」は、原発事故の後かなり長い歳月を注ぎこんで〈プロメテウスの罫〉という連載を重ねた。原発周辺地区の人々の様子やその後の事情をルポルターージュした文章で、日本の



## ロボットで挑む復興



水中ロボット「飯塚さん」提供



津々浦々に現場の問題を報告したものになっている。その中でも希望のみえるもの、再考させるものなど、様々な問題を提起して我々読者に語りかけてくれた。

その中から一つだけ紹介しておこう。平成27年10月24日付け（1426回）のものである。福島工業高専の専攻科（本科終了したのち2年間更に勉強を重ね学位授与機構の試験に合格すれば学士が授与されるシステム）の学生が、セシウム処理で企業との合同研究を通してかなり斬新なアイデアを出しながら前向きに取り組んでいることが紹介されたのだ。この学生には、地震被害で背負い込んできたものがあつたようだ。いまここに縷々説明するつもりはない。ただ単純に元高専教員として、頼もしく且つ嬉しくも思った。「朝日新聞」の〈プロメテウスの罫〉を毎回ではないが、眼を通していて現代という複雑な社会機構を考えざるも得ないことも度々であつた。

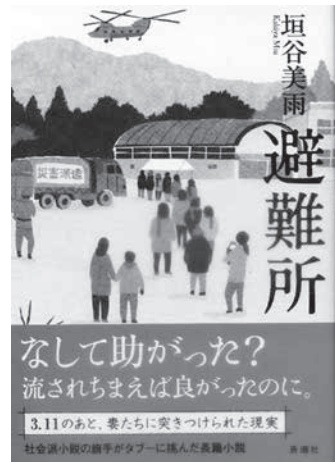
かつて明治の中ごろ松原岩五郎が、『最暗黒の東京』（明治26年11月、民友社）で記した明治維新の発展第一主義に取り残された人々の生活を活写して世に衝撃を与えたことはよく知られている。ここでのルポルタージュのあり方は、貧民層を細かく叙述したことや経済機構支配原理への言及が重要になっているが、いま原発処理問題は批判だけでは前に進まない現実がある。その意味で〈プロメテウスの罫〉は、ルポルタージュの方法を通して様々な立場の価値観を向日的方向へという希望をも提供してくれた。

#### 4、避難所で、学校で

先ほどJR福島駅前辰巳屋ホテルでの新エネルギーシンポジウムの集会を紹介した。その時会場から「我々避難者は」という鋭い声が上がったことは述べた通りだ。この3・11の地震が広い地域の沿岸に甚大な被害を与えたことは、今さら述べるまでもない。そしてこの避難者たちが、一時的留まる所という空間が一つの大きな問題となった。

この避難場所を、物語の舞台として客観化する作家が現れる。比較的若い作家で垣谷美雨という作家が、『避難所』（平成26年12月、新潮社）という作品を発表する。この作家は、もしもの世界をリアリズム的に描く「if小説」などを得意とするが高齢者問題や社会問題でも優れた作品を手掛けている。

この『避難所』は、津波で家を失い困り果てた人たちとりわけ女性たちが抱えた問題を取り扱ったものである。漆山遠乃は、津波で愛する夫を失い乳飲み子を抱えて段ボールで仕切られた体育館で窮屈極まりない生活を余儀なくされている。そこに舅が、新しい家に入って遠乃に同居と義兄との再婚を強要する。彼女は、亡くなった夫は愛していたが残された家族との同居ましてや義兄との再婚などはもつての外だった。遠乃は、舅から難癖をつけられ相当に参ってしまうが如何せん帰る家がない。長男の嫁という立場が、このような未曾有の困難に出会うと更



に困窮度が増すばかりであった。

一方山野渚は、夫の暴力に耐えかねて離婚を考えながら息子と共に別居し、昼が喫茶店夜はスナックで働いている。

更に同じように離婚できずにいた椿原福子は、津波で偶然流されてきた少年を助ける。

彼女等三家族の女性たちが、知らず知らずのうちに近づき自分たちの将来の姿を考えるようになる。結論は、東京での借家住まいでしばらくは共同生活からそれぞれの未来を展望しようとするのである。希望の彼方が暗示的に語られるという結末である。

様々なかたちで色々なものを強いられる弱い立場の女性たちが、意外にも決意をもってすれば転換への可能性が開かれるかもしれないという結末に向かうのだ。

この3人の女性たちの物語は、それまでの家庭生活と避難所とでも、相当の我慢と沈黙とを要求されるのだが、それは東北人特有の気質とでも形容できるものかもしれない。

この東北人特有の我慢と沈黙との気質に、やや過激な批評を加えようとする作家が登場する。前述した真山仁である。彼は、『そして、星の輝く夜がくる』（平成26年3月、講談社）を刊行した。この物語に登場する主人公は、3・11の後兵庫県から被災地支援教員を希望してきた。彼は、かつて阪神大地震のときに世話になった恩返しの気持ちとその他の個人的事情を抱えての心境であったが、教育熱意は相当なものであり奮闘ぶりが紹介される。

ところがこの主人公は、被災地東北の海岸地域の子供たちに一種周囲とは違う説き方をする。子どもたちに思っていることを吐き出せと言う。泣きたいときは泣き、叫びたいときは叫び、こころに湧き出てくる感情を我慢せずして吐き出せと説くのであった。関西人特有の感情の表現と言えはそうかもしれないが、東北の子供たちにとっては衝撃でもあった。この物語の主人公の教員は、ひとつの解放された精神の現れを説明しようとしたのだ。東北出身の子供たちには、思いもよらない感情表現の発露でもあった。被災地の子供たちに我慢だけを強いるのは、人間の成長上芳しくないというものであったのだ。素直な子供らしい日常の感情表現が、この震災でどれほど阻まれているのかという、真山仁の作家的眼差しがここにはあった。

次いで報告だが真山仁は、この物語を上梓した後盛岡や釜石で読者とのトークイベントを催し、作家と読者との意見交換会を開き一定の成果を得たようでもあった。

## 5、犠牲者との交感絵図

震災で大変な感情を抱いた人は、ものすごい数と言えし、その心模様は千差万別でなかなかその相対化や癒しの領域にまで手が届かないのが現状だろう。とりわけ犠牲者に対して、残された人間が如何ような姿勢や心模様を抱いて生活すべきかは、かなり重いテーマとしてつきまとった。この問題に震災後2年を経てとカウントされる時点で、驚きの名作が生み出される。

いとうせいこう『想像ラジオ』（平成25年3月、河出書房新社）は、好評をもって迎えられたと言ってよい。文庫版の星野智幸の解説の部分、引用してみる。物語の4章の部分からのものである。

「(略) 生者と死者は持ちつ持たれつなんだよ。決して一方的な関係じゃない。どちらかだけがあるんじゃないでふたつでひとつなんだ」(略)

「(略) 生きている僕は亡くなった君のことをしじゅう思いながら人生を送っていくし、亡くなっている君は生きている僕からの呼びかけをもとに存在して、僕を通して考える。そして一緒に未来を作る。(略)

それは架空とも事実ともつかない記述ですが、そのどちらともつかない場所にこそ、死者と生者が抱きしめあっている時空といえるでしょう。(略)

この小説の妙味は、死んだ家族の喪失感に悩む人たちの一つの心の緩和のかたちを提出したところにある。生者と死者との渾然とした一体感の中に浸れる時空を紡ぎだすところに、その特異性を発揮したのである。この小説を手にした時、岩手県沿岸部だったか被災した電話ボックスを自分の敷地に持ち込み、そこで犠牲者との会話をするというテレビ放映をみたことを筆者は思い出した。あるいはのち漂流ポストというものを、敷地の中に置き震災で失った家族への手紙を受け止めるという喫茶店が話題になったことも知った。

いとうせいこうは、震災での犠牲者を受け止める生者の逃れられない苦しみを昇華するひとつの方法を紡ぎ出したのだ。生き残った人のやるせなさを、如何ようにバランスをとることが可能かを示した。これは小説の一つの達成でもあった。

## 6、テクノロジーへの振り返り

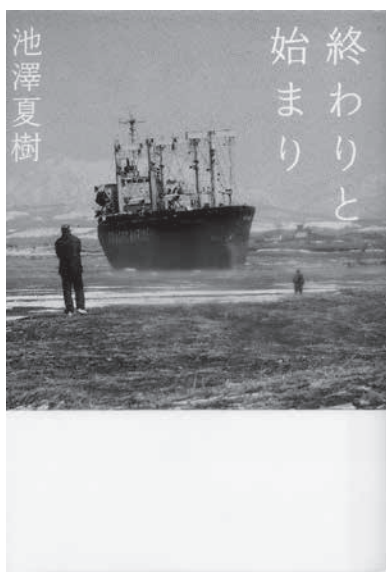
関東大震災で明治維新以来の近代技術への信頼が瓦解したことは周知の事実だが、その象徴が歓楽地の目玉的建造物浅草十二階の崩壊だったことは意義深い。それから88年を経過した今回の3・11でも同じように技術への懐疑が湧きあがったことも、歴史の繰り返しのように見える。この章は、まったくの管見であることをお断りする。

池澤夏樹『終わりと始まり』(平成25年7月、朝日新聞社)は、いくつかのことを示唆して興味深い。池澤は、今さら述べるまでもないことだが、芥川賞受賞後の単行本『スタイル・ライフ』(昭和63年3月、中央公論社)や、『マシマス・ギリの失脚』(平成5年6月、新潮社)で谷崎賞など、軒並み様々な賞を獲得している優れた作家だが、他方河出書房新社『世界文学全集』個人編集でも朝日賞を受賞している。広い視野をもって世界を眺めることが出来る稀有な人でもある。

とりわけこの『世界文学全集』に日本の作家では石牟礼道子『苦海浄土』と、ロシア作家ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』と、を収録させたことは驚きだった。石牟礼道子は多くの人が知っている作家だが、ロシアのブルガーコフという作家は一部の人たちにしか知られていなかった物書きだ。ロシア革命時に医師として翻弄された生活を余儀なくされ、のちロシア革命の欺瞞性を批判し作品発表場所をなくしつつ失意の中で病没した作家だ。既に邦訳は40年以上前から流通していたが、今回の新企画で注目した人も増えたに違いない。

前述した『終わりと始まり』の〈間違いだらけの電力選び〉の章から印象的な部分を引用する。

国際社会という場で考えるならば、我々は恐ろしく恥ずかしいことをしてしまった。事故を起こし大量の放射能性物質を大気中と海中に放出したのだ。(略)そして当時の野田首相の演説を批判するのですが私は



個人的に野田さんを好きなのでこの部分は割愛します。更に今の安部首相の政策をなじります。「原発の輸出は倫理的に許されるのだろうか？」続けて「問題は、コストだけではない。「放射能は」は、不安なのだ。どこでどれだけ被爆したか自分ではわからない。将来、何かの病気にかかった時に、それはある原発事故に由来するものではないか、どこで被ばくして、それ故に寿命を不当に縮められたのではないかと疑う(略)」

福島県沿岸部や放射能を抱えた雲が漂った地域の人々が、この先以上のような思いで生きていくとしたら大変なことになると池澤夏樹はいう。

実はこの池澤の思いは、過剰ではなく確かな現実として出て来た。それが前述した甲状腺がんが見つかった子供の報告であり、5年半が経過した現在でも居住が出来ない放射線量の高い地域があるということはこの記述を裏打ちするものとして説明できる。

更に個人的な事情を紹介して恐縮だが、池澤の文章に即して報告したいこともある。筆者の親族に、40代で米国人と結婚した日本人女性がいる。平成28年の現在84歳、米国ノースカロライナで独り亡き夫の土地で畑を耕し年金と貯金の切り崩しで生活している。子どもは無く、夫は再婚で元海軍籍だった。その夫は再婚がよほど嬉しかったらしく、自らの土地に日本での生活経験から鳥居を作り、自分と配偶者の名前を併記しそのパラダイスだと綴った。が残念ながら夫は60歳になる前に、白血病で死亡。かつてビキニ環礁付近で、航行中の艦船に乗り込んでいたことが病気の誘因だったらしい。米国がビキニ環礁での核実験を行った1946(昭和21年)7月、その通達が米国籍の軍艦にもうまく行き届かなかったとも仄聞した。が軍人であったため、家族は年月を遡っての公言は避けた。

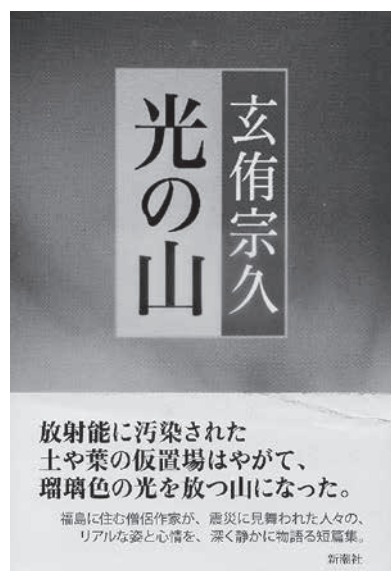
池澤夏樹の記述は、確かだと言わざるを得ない。

## 7. もうひとつの文学的達成

3・11の震災後に叢生した文学作品の中に高橋源一郎『恋する原発』のようなものも驚異であったが、寓意小説でなかなか見逃すことが出来ない出来栄を示したものも現れた。玄侑宗久『光の山』(平成25年4月、新潮社)である。玄侑は、作家の傍ら住職も兼ね震災の年に「復興構想会議」メンバーだった人物である。彼の住まいは、三春町故原発には切実な意識を持っている。

この物語は爺さんと称する70歳過ぎの老人が、福島原発周辺の「除染で出た土や廃棄物」を自分の広大な敷地に集める話である。その息子は、放射線被爆をめぐって配偶者と「毎晩のように議論」し結局離婚する。後爺さんの遺言は、「廃棄物」の山の上で「茶毘」に付すことだった。95歳の寿命を全うしてのことであったが。その時「あの山」が、「紫色のオーラ」を発し、「闇を押し戻しながら光った」という状態になる。そしてここが、ホーシャノー観光ツアー地と化すという結末になる。

寓意の最たる内容で、「除染」した「廃棄物」の「中間貯蔵施設」も「決まらず」とか、「チェ





ルノブイリの事故から二十八年経って」の放射線量と同じとか、「『ホルミシス派』」や「『予防医学派』」などとという表現がちりばめられている。

爺さんの自己犠牲的行為の果ての「茶毘」が、「瑠璃色」の「薬師如来のご来迎」だと評言される。この物語の特徴は、放射線量の危険から醸される不安や恐怖に伴う感情を、それらを超えて受け入れた人間が如何に尊い「光の山」として輝くかという寓意小説だ。不安を超えた後に「光の山」が輝くのだ。それは内実が示されないが「大丈夫、大丈夫」という考えで出来上がるとも語り掛ける。対立や懸念や不安などの議論だけでは解決しないものを暗示しているとも読める。

寓意の物語として、一つの状況論をも含んでの文学的達成と言えるかもしれない。前述したカフカの『城』の物語要素や意味をめぐって、解釈の可能性が幾様にも取りざたされるように、この物語の寓意性もまた多様な解釈を孕んで面白みのある膨らみを呈したと言えるだろう。

補遺／本稿は、東洋大学東洋学研究所主催の公開講演会（平成27年11月14日、白山キャンパス）での口頭発表「震災と文学」に、加筆訂正したものである。山崎甲一氏に御礼申し上げる。

尚、大和田茂氏や宮城光信氏からも示唆を得た。

